継時的比較の個人差¹——継時的比較志向性尺度の 作成と検討——

並川 努² 名古屋大学

Individual difference in making temporal comparisons: Development of
Temporal Comparison Orientation Scale

Tsutomu Namikawa (Nagoya University)

This study developed the Temporal Comparison Orientation Scale and investigated its reliability and validity. Study 1 ($N=481$) examined the factor structure and correlations with other related scales (self-consciousness scale; reevaluation tendency scale; self-esteem scale; depression scale; social comparison orientation scale). The results suggested that the Temporal Comparison Orientation Scale had good reliability and validity. Study 2 examined the relationship between temporal comparison orientation and affect generated by temporal comparisons. The results showed that individuals high in temporal comparison orientation experienced more negative affect after upward and downward comparisons than individuals low in temporal comparison orientation. The possible uses and limitations of the scale were discussed.

Key words: temporal comparison, social comparison, reliability, validity.

The Japanese Journal of Psychology
2011, Vol. 81, No. 6, pp. 593-601

自分自身の能力やパーソナリティなどを評価する際に、人はさまざまな対象と比較を行う。たとえば自己と身近な他者とを比べることによって、自己の能力が高いと言えるか否かを判断することがある。これは社会的比較 (Festinger, 1954) と呼ばれ、社会心理学の領域を中心に多くの研究がなされてきた理論である。また、このような他者との比較だけでなく、人は異なる時点における自己間の比較を行うこともある。たとえば、“過去の自己”と“現在の自己”とを比べることによって、過去よりも成長した自己を認識したり、一貫した自己の姿を確認したりする。この“過去の自己”と“現在の自己”のように異なる時点における自己間の比較のことは継時的比較と呼ばれている (Albert, 1977)。これらの比較は、いずれも自己をとらえていく上で重要な役割を担っている (Suls &

Wheeler, 2000; 高田, 1992)。

社会的比較志向性に関する研究

しかしながら、これらの比較をどの程度行うのかには個人差があり、必ずしも全ての人がそれを積極的にやっているわけではない (Bunck & Gibbons, 2006)。社会的比較に関する情報を多く収集し、他者との比較を積極的に行おうとする人もいれば、あまりそれを意識しない人も存在する。

近年、社会的比較におけるこの個人差、すなわち社会的比較志向性 (social comparison orientation) に注目する研究がいくつかみられる。たとえば、Gibbons & Bunck (1999) は、社会的比較志向性を測定する尺度 (Iowa-Netherlands comparison orientation measure; 以下 INCOM とする) を作成し、その可能性について論じている。

INCOM は、Gibbons & Bunck (1999) によると社会的比較の情報への注意 (Lennox & Wolfe, 1984) やセルフモニタリング (Snyder, 1974)、Big-Five (Costa & McCrae, 1992)、など多くの変数と、必ずしも強くはないものの有意な相関がみられることが指摘されている。また、Bunck & Gibbons (2006) は、社会的比較志向性の高さに関連する特徴として、(a)自己

Correspondence concerning this article should be sent to: Tsutomu Namikawa, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan (e-mail: nami.t@cc.nagoya-u.ac.jp)

¹ 本研究の一部は日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会において発表された。

² 本研究をご指導いただいた名古屋大学大学院教育発達科学研究科の野口 裕之教授に深く感謝申し上げます。

への意識の活性, (b)他者への関心の高さ, (c)ネガティブな感情の高さや自己評価の低さの3点を挙げている。実際, Gibbons & Buunk (1999) でもその指摘に対応する形で, (a)公的自己意識との正の相関 ($r_s = .38-.49$) や, (b)対人志向性との正の相関 ($r = .45$) がみられているほか, 強くはないものの, (c) Beck の抑うつ尺度 (Beck, 1967) や CES-D (Radloff, 1977) と有意な正の相関 ($r_s = .13-.25$), 自尊感情とも有意な負の相関 ($r_s = -.09-.23$) などがみられている。

また, この社会的比較志向性の高低は, 比較によって生じる感情や評価にも影響を与えていることも示唆されている。たとえば, 社会的比較志向性が高い人は, 自分より優れた他者との比較である上方比較によってネガティブな感情を, 自分よりも劣った他者との比較である下方比較によってポジティブな感情をそれぞれ強く経験する傾向があることが報告されている (Buunk, Zurriaga, Peiro, Nauta, & Gosalvez, 2005)。

さらに, INCOM を用いた他の研究からも社会的比較志向性の高さが, リスク認知や危険行動 (Gibbons & Gerrard, 1995; Gibbons, Lane, Gerrard, Pomery, & Lautrup, 2002), 関係性や集団の満足度 (Bunnk, Oldersma, & de Dreu, 2001; Buunk, Nauta, & Molleman, 2005), パーンアウト (Buunk, Ybema, Gibbons, & Ipenburg, 2001), 大学生活の不安 (友寄・佐藤, 2006), 学業的援助要請 (野崎, 2006) などさまざまな変数と関連していることが報告されている。たとえば Buunk, Ybema, Gibbons et al. (2001) は, 社会的比較志向性の高い人では, パーンアウトの傾向が高い人ほど下方比較によってネガティブな感情が喚起される傾向がみられるが, 社会的比較志向性の低い人ではそのような傾向はみられないことを指摘している。また, Bunnk, Oldersma et al. (2001) は, 社会的比較志向性が高い場合に, 下方比較を行うことが関係性における不満を和らげることを示している。

これらの知見は, 比較のプロセスや比較による自己評価をとらえる上で, 社会的比較志向性が重要な観点となりうることを示唆するものである。社会的比較志向性は必ずしも直接的に他の変数に影響を与えるわけではないが, Buunk, Zurriaga et al. (2005) などでも示唆されるように, 社会的比較を行うことによって生じる感情など, 比較過程について詳細な検討をしていく上で特に重要な指標となると考えられる。また, Wheeler (2000) でも INCOM は新しい尺度として社会的比較過程の研究における重要性が指摘されている。

継時的比較と継時的比較志向性

社会的比較志向性についてはこのように実証的な研究が重ねられている一方で, 継時的比較における個人差については, まだ実証的な研究が重ねられてはいな

い。たとえば, 継時的比較が用いられる程度の集団差, 特に発達の差異については, Suls & Mullen (1982) などでも社会的比較と併せて議論されており, 日本でも高田 (1993) などでも検討がなされている。また, 過去を振り返るという点で共通する回想研究では, 長田・長田 (1994) や野村・橋本 (2001) などでも回想の頻度を測定する形で検討されている。しかしながら, 継時的比較において, 社会的比較志向性のような個人差を扱う実証的研究は, 尺度の開発を含めて確認されていない。

しかし, 社会的比較や回想において個人差が存在するように, 継時的比較においても個人差は存在すると考えられる。すなわち, 継時的比較に関する情報を多く集め, 継時的比較を多く行おうとする人もいれば, 逆に継時的比較をまったく意識しない人も存在するのではないだろうか。この個人差は, やはり社会的比較志向性と同様に, 比較の結果生じる自己評価や感情に少なからぬ影響を与えていると考えられる。したがって, 比較過程の詳細を検討する際に, 継時的比較志向性は有用な指標となると考えられる。たとえば, 継時的比較を行うことによって感情がどのような影響を受けるのかを検討する際には, これらの志向性が重要な役割を担っていると推測される。

また, 継時的比較は, Wilson & Ross (2000) も指摘しているように, 自己をポジティブにとらえようとする際には社会的比較よりも多く用いられるなど, 自己高揚とも密接に関連しているものであると考えられる。そのため, 継時的比較について, 継時的比較志向性を含めて詳細に検討していくことは, 単に比較の過程に関する現象をとらえる上で重要なだけでなく, 自己評価の全体像をとらえる上でも大きな役割を果たすのではないだろうか。

さらに“過去”をとらえるという点からも継時的比較志向性は重要なものとなると考えられる。従来から, 過去を想起することや過去をどのようにとらえるかは, さまざまな形で自己評価や精神的健康と関連していることが示唆されている。たとえば, 高齢者の回想法に関する研究では, 過去を振り返ることが適応的な効果をもたらす場合があることが示されていたり (野村, 1998), 過去の他者との肯定的なエピソードを想起することが, その他者との関係性の評価にも肯定的に作用することなども示唆されている (Alea & Bluck, 2007)。こういった“過去”を扱う研究は, これまで回想研究や自伝的記憶研究, 時間的展望研究等の領域で主に行われてきた。しかし, 本研究で扱うような継時的比較という視点でこの“過去”に対してアプローチすることは, 従来とは異なった視点から“過去”をとらえることにつながる。また, 比較過程としてとらえることは, これまで社会的比較研究で提案されてきたさまざまな理論やモデルを援用することにも

つながり，“過去”についての新たな理論の構築に寄与できる可能性がある。

たとえば Wilson & Ross (2001) や Ross & Wilson (2002) では、社会的比較における自己評価維持モデル (Tesser, 1988) における他者との親密度を“過去の自己”との主観的な時間距離に置き換えるなどの形で継時的自己評価理論が提案されている。そこでは、人には自己高揚動機が存在するということを前提に、継時的比較において比較対象となる“過去の自己”が、主観的な時間距離などと関連し、“現在の自己”を相対的に高く評価できるように用いられていると指摘されている。たとえば、良くない“過去の自己”との比較（下方比較）においては、その良くない“過去の自己”を時間的に遠くに感じることによって、より成長などを実感でき、“現在の自己”にとってポジティブに作用するのに対し、良くない“過去の自己”を近く感じるとそれが現在にも持続しているものとなり、“現在の自己”にとってネガティブに作用する。このような理論をもとに、継時的比較過程について検討していくことは自己評価のメカニズムを考える上でも重要な位置を占めるものと考えられる。しかしながら、Wilson & Ross (2001) や Ross & Wilson (2002) などの知見は、日本などでは必ずしも再現されないという指摘もなされている (工藤・遠藤, 2007; 佐藤, 2008)。しかし、これらの議論においても継時的比較志向性といった個人差を加えることによって、より詳細な検討が可能になると考えられる。

そこで本研究では、継時的比較志向性を定量的にとらえていくために、継時的比較志向性尺度を作成することを主な目的とする。まず予備調査において、項目収集を行い尺度の予備的検討を行う。また調査1ではその結果を踏まえ、継時的比較志向性尺度の信頼性、妥当性の確認を行う。さらに調査2においては、尺度の適用可能性について検討するために、測定された継時的比較志向性が比較によって生じる感情にどのような影響を与えるかについて検討を行う。

なお、社会的比較志向性を測定する INCOM では、意見比較と能力比較の2因子が見出されている。これらの因子は Festinger (1954) が社会的比較について論じる中で“人には意見や能力について評価する動機が存在する (p. 117)”などの形で指摘した二つの側面に対応しているものであり、意見や能力について他者との比較を志向する程度を示すものである。しかし、Gibbons & Buunk (1999) では、両因子の相関も .61 と高いことなどから、得点算出においてはこれら異なる因子の得点を合計し、1因子の尺度として分析を行っている。しかしながら、異なる下位尺度の得点を合計することは、測定している概念を曖昧にし、下位尺度ごとに本来測定されていた特徴を打ち消してしまう恐れがあると考えられる。また“意見比較”と

“能力比較”の両者はその生起プロセスも異なる現象であると考えられることや、“能力比較”を社会的比較志向性の概念としてとらえた方が妥当ではないかという指摘も存在している (外山, 2002)。そこで、ここでは“能力比較”に主に焦点を当てることによって、1因子構造の概念として、継時的比較志向性をとらえるを試みる。

予 備 調 査

目 的

継時的比較志向性の個人差を測定するための尺度作成における項目収集と尺度の予備的検討を行うことを目的とする。

方 法

調査協力者 大学生 205 名 (男性 63 名, 女性 140 名, 不明 2 名), 平均年齢は 18.73 歳 ($SD=1.21$) であった。

質問紙構成 本調査で新たに作成された継時的比較志向性尺度 12 項目を使用した。項目は以下の手続きで作成された。まず INCOM (Gibbons & Buunk, 1999; 外山, 2002) の、“能力比較”因子の項目内容をもとに、“他者”を“過去の自己”に変更する形で 7 項目を作成した (たとえば“物事がうまく進んでいるかどうか評価する時には、昔の状況と比べてみることが多い”)。また、項目の補充や修正の参考にすることを目的に、大学生 52 名 (男性 29 名, 女性 23 名) を対象にした調査を行った。調査では、最近 1ヵ月間に過去の自分との比較を行ったことがあるかどうか、あればどういった場面でどういった内容について比較を行ったのか、思いつくものをできるだけ多く記述するように教示した。得られた記述は、類似するものをまとめて行く形でグループ化され、整理された。その結果から、継時的比較においては過去の自分と比べて“成長したかどうか”や“変わったかどうか”といった表現が多くみられたため、これらを参考に 5 項目を作成し、追加した (たとえば“以前よりも自分が成長しているかどうか考えることが多い”)。

なお、尺度への回答は“とてもあてはまる”“ややあてはまる”“どちらともいえない”“あまりあてはまらない”“まったくあてはまらない”の 5 件法を用いた。

結果と考察

はじめに、継時的比較志向性尺度について各項目の平均値を算出したところ、1項目だけ平均値が 4.52 ($SD=0.71$) と高い値を示す項目がみられた。当該項目は、尺度全体との相関も .20 を下回っていたため不適切であると判断し、その項目を除いた 11 項目を用

Table 1
継時的比較志向性尺度の項目分析結果

Item	M	SD	I-T 相関	因子負荷
1	3.81	0.99	0.71	.77
2	2.75	1.21	0.64	.66
3	3.80	1.11	0.55	.60
4	3.41	1.15	0.73	.78
5	2.77	1.15	0.51	.54
6	2.97	1.16	0.57	.59
7	3.60	0.96	0.47	.51
8	3.41	1.15	0.74	.79
9	3.61	1.05	0.69	.74
10	2.61	1.07	0.48	.50
11	2.09	1.00	0.69	.74

$\alpha = .89$

いてその後の分析を進めた。各項目の平均値と標準偏差, I-T 相関などは Table 1 に示した。

次に, 因子分析 (主因子法) を行い, 尺度の因子構造の検討を行った。その結果, 固有値の減衰状況を見ると第 1 固有値から順に 5.44, 1.11, 0.85, 0.75 (以下省略) であり, 1 因子構造であると判断された³。因子負荷量もすべての項目で .50 を超えており, 1 次元性の強い尺度であると判断された。また, 信頼性係数の推定値として α 係数を算出したところ .89 と高い値が得られた。

調 査 1

目 的

予備調査で作成された継時的比較志向性尺度について, より詳細に信頼性, 妥当性の検討を行うことを目的とする。

妥当性の検討では, 社会的比較志向性 (Bunnk & Gibbons, 2006) において指摘されている(a)自己への意識の活性, (b)他者への関心の高さ, (c)ネガティブな感情の高さの 3 点を参考に, (a)公的自己意識・私的自己意識, (b)過去に対する評価傾向, (c)自己に対する評価や感情, の 3 点との関連がみられるかを基準とする。継時的比較を多く志向することは, 自己に対する意識が高いことと関連しているとともに, 比較対象となる過去に対しても関心を持ち, 多くの評価を行うこととも関連していると考えられる。また, 比較への志向性は自己の不確かさと密接に関連していると考えられ, 自己の不確かさと関連する低い自己評価や自己に対するネガティブな感情とも関連していると考えられる。そのため, INCOM 同様に, これらの変数とは強

Table 2
各尺度の基本統計量

	n	M	SD
継時的比較志向性	475	36.92	8.89
私的自己意識	252	30.71	5.06
公的自己意識	254	32.31	5.68
否定的回想	269	21.44	5.10
肯定的回想	267	42.93	10.45
再評価傾向	268	42.41	8.75
抑うつ	261	43.73	7.07
自尊感情	397	28.98	7.06
社会的比較志向性	303	34.78	7.11

くはないものの有意な相関がみられると考えられる。

さらに, (d)社会的比較志向性との関連も検討する。Wilson & Ross (2000) でも指摘されているように, 継時的比較と社会的比較は, 用いられる際の動機なども異なると考えられるため, それらに対する志向性も完全には一致しないと考えられる。しかし, (現在の) 自己と異なるものと比較を行うという点では社会的比較も継時的比較も同じであるため, 両者の間には有意な相関がみられると考えられる。

方 法

調査協力者 大学生および専門学校生 481 名 (男性 252 名, 女性 229 名), 平均年齢は 19.81 歳 ($SD = 1.73$) であった。

質問紙構成 (a)公的自己意識・私的自己意識に関しては, 押見・渡辺・石川 (1985) による自己意識尺度から, 公的自己意識および私的自己意識の二つの下位尺度を用いた。(b)過去に対する評価傾向は, ネガティブな過去の出来事を再評価する傾向を測定する再評価傾向尺度 (野村・橋本, 2001) を用いた。また, 回想される過去の評価も探索的に検討するため, 回想がポジティブな感情や認知を伴うかどうかを測定する肯定的回想尺度および, 回想がネガティブな感情や認知を伴うかどうかを測定する否定的回想尺度 (いずれも野村・橋本, 2001) も併せて用いた。(c)自己に対する感情や評価に関しては, 抑うつ傾向と自尊感情の 2 点を取り上げた。抑うつについては SDS (Zung, 1965; 福田・小林, 1973) を, 自尊感情については Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の邦訳版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。(d)社会的比較志向性は, Gibbons & Buunk (1999) による INCOM の邦訳版 (外山, 2002) を用いた。(e)継時的比較志向性については, 予備調査で新たに作成された 11 項目を用いた。回答は予備調査と同様に 5 件法を用いた。

手続き 質問紙を授業時に一斉に配布し, 回収する形で実施した。ただし, 調査協力者の負担を軽減する

³ なお, 念のため 2 因子構造を仮定し, プロマックス回転を行ったが解釈可能な因子は抽出されなかった。

Table 3
継時的比較志向性尺度の因子分析結果

	F1
1. 今の自分と昔の自分を比べることがよくある	.77
2. 何かをするときに、昔の自分だったらどうしたかを考えることが多い	.63
3. 自分の過去をよく思い出す	.62
4. 今の自分がどんな性格であるかを、昔の自分と比べて考えることが多い	.73
5. 昔の自分について考えることはほとんどない ^{a)}	.66
6. 私は、昔の自分だったら同じ状況でどうするのかなどと考えたりすることはない ^{a)}	.51
7. 以前よりも自分が成長しているかどうか考えることが多い	.49
8. 昔の自分の状況と、今の自分の状況を比べることがよくある	.73
9. 自分が、昔と変わったかどうかを考えることがよくある	.74
10. 物事がうまく進んでいるかどうか評価する時には、昔の状況と比べてみることが多い	.45
11. 今の自分の境遇と、昔の自分の境遇との違いを考えることはほとんどない ^{a)}	.65

a) 逆転項目

ため、項目数を勘案の上、上記の尺度から3尺度もしくは4尺度を含む冊子を6種類作成し、ランダムに配布した。そのため尺度によって回答した人数が異なっていた。なお、各尺度の最終的な有効回答者数は、Table 2に示した。

結果と考察

まず継時的比較志向性尺度11項目について、主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の減衰状況が第1固有値から順に5.11, 1.07, 0.93, 0.78であったため、1因子構造であると判断された。因子分析の結果はTable 3に示した⁴。さらに、信頼性係数の推定値としてクロンバックの α 係数を算出したところ.88と高い値が得られた。これらのことから、継時的比較志向性尺度は、1次元性も高く、内的に一貫した尺度であることが示され、十分な信頼性を備えていると判断された。そこで、継時的比較尺度11項目の得点を合計することで、継時的比較志向性の得点とした。他の尺度についても同様に合計を求めることで尺度得点を算出した。各尺度の平均値、標準偏差はTable 2に示した。継時的比較志向性の平均値は、36.92 ($SD=8.89$)であった。また、性差についても検討したところ、男性 ($M=35.59$, $SD=9.00$)の方が女性 ($M=38.38$, $SD=8.56$)に比べて有意に平均値が低いことが示された ($t(473)=3.45$, $p<.05$)。社会的比較志向性 (Gibbons & Buunk, 1999)でも、同様に男性の方が有意に低いことが示されており、この傾向は社会的、継時的いずれにおいても共通することが示唆された。

次に、妥当性の検討のため、各尺度間の相関係数を

算出した。その結果、まず公的自己意識尺度とは $r=.42$ ($p<.05$)、私的自己意識尺度とは $r=.43$ ($p<.05$)の有意な正の相関がみられた。また、過去に関連する尺度との相関では、肯定的回想尺度 ($r=.25$, $p<.05$)、否定的回想尺度 ($r=.22$, $p<.05$)、再評価傾向尺度 ($r=.19$, $p<.05$)のいずれとも、弱いものの有意な正の相関がみられた。さらに抑うつ尺度とは有意な正の相関 ($r=.19$, $p<.05$)、自尊感情尺度とは有意な負の相関 ($r=-.22$, $p<.05$)が、社会的比較志向性尺度とは有意な正の相関 ($r=.45$, $p<.05$)がみられた。

これらは、いずれも仮説と一致した傾向を示すものであった。すなわち、継時的比較志向性は、自己に対する意識の高さや過去に対する関心、ネガティブな情動と関連があり、社会的比較志向性とも関連があった。そのため、継時的比較志向性尺度は一定の妥当性を有していると判断された。

しかしながら、再評価傾向尺度との相関係数は、有意ではあったものの、 $r=.19$ と低い値であった。この点に関しては、今回用いた再評価傾向尺度が、単に過去の自己について関心がありそれについて評価を行うことだけではなく、ネガティブな過去を回想しそれを再評価する傾向をとらえようとするものであったことが関連していると考えられる。継時的比較には必ずしもネガティブな過去を対象とする下方比較のみではなく、ポジティブな過去との比較を行う上方比較も含まれていると考えられる。そのため、継時的比較志向性の高い人の中には、再評価傾向尺度で測定されるようなネガティブな過去の出来事を意識する人だけでなく、ポジティブな過去を対象とした比較を志向する人も含まれているはずである。そのため仮説通り両者に関連はあるものの、高い相関ではなかったと考えられる。この点に関しては、純粋に回想量を測る尺度を用いるなどして再度検討する必要がある。なお、抑うつ

⁴ 予備的に男女別でも因子分析を行ったところ、同様の1因子構造が確認されたため、以下では男女のデータを合わせて分析を行った。

尺度や自尊感情尺度との相関も決して高くはなかった。しかし、これらは社会的比較志向性の場合 (Gibbons & Buunk, 1999) も同程度の相関係数 (たとえば、アメリカのサンプルで $r_s = -.09$ — $-.23$) が報告されており、今回の検討においては妥当な値であると判断される。

調査 2

目的

社会的比較志向性は、比較後の感情などと関連していることが示唆されていた (Buunk, Ybema, Van der Zee, Schaufeli, & Gibbons, 2001)。そのため継時的比較においても、継時的比較志向性の高さは比較後に感じる感情の強さなどに影響を与えているものと思われる。そこで継時的比較志向性の有用性について議論するために、継時的比較志向性の高さが比較を行った後の感情と関連しているかどうかを探索的に検討する。

また、調査 1 では、継時的比較志向性と過去を再評価する傾向との相関が必ずしも高くなかった。そこで、調査 2 では回想量および上方比較、下方比較の頻度との関連を検討することによって、測定された継時的比較志向性が、比較対象となる過去への関心と関連していることを確認する。

方法

調査協力者 大学生 200 名 (男性 72 名, 女性 128 名), 平均年齢は 18.95 歳 ($SD=1.06$) であった。

質問紙構成 (a)継時的比較志向性は、調査 1 と同一の継時的比較志向性尺度を用いた。(b)回想量については、長田・長田 (1994) による回想尺度を用いた。尺度は 8 項目からなり、“よく考える”から“考えない”の 4 件法で尋ねた。(c)比較の頻度では、継時的な上方比較と下方比較をどの程度行うかについて、“今より良かった (悪かった) 頃の ‘過去の自分’ と、‘今の自分’ とを比べて考えること”がどの程度あるか “まったくない”から“よくある”までの 5 件法で尋ねた。(d)比較後の感情として、継時的な上方比較や下方比較をした後に、どのくらいポジティブな感情やネガティブな感情を感じるかについて Buunk, Ybema, Van der Zee et al. (2001) などを参考にして各 1 項目を新たに作成し用いた。上方比較によるポジティブ (ネガティブ) な感情については “今と比べてもっと良かった頃のことを思い出して、よい (不快な) 気分になること”がどのくらいあるかを、“まったくない”から “よくある”までの 5 件法で尋ねた。同様に、下方比較によるポジティブ (ネガティブ) な感情についても “今よりも悪かった頃のことを思い出して、よい (不快な) 気分になること”がどのくらいあるかを尋ね

た。

手続き 質問紙を授業時に一斉に配布し、回収する形で実施した。

結果と考察

まず、継時的比較志向性尺度の妥当性検討のため、比較対象となる過去への関心と関連しているかを検討した。継時的比較志向性と、回想量の相関を求めたところ、 $r = .52$ ($p < .01$) の有意な相関が認められた。また、比較の頻度との関連では、上方比較とは $r = .43$ ($p < .01$)、下方比較とは $r = .47$ ($p < .01$) の有意な相関がみられた。そのため、調査 1 で不十分であった過去への関心の高さとの関連は確認できたと考えられ、継時的比較志向性尺度の妥当性があらためて確認された。

さらに、継時的比較志向性が比較後の感情とどのように関連しているかについて検討を行った。その結果、継時的比較志向性の高さは、上方比較後にネガティブな感情を経験する程度 ($r = .33$, $p < .01$)、および下方比較後にネガティブな感情を経験する程度 ($r = .33$, $p < .01$) の両方と有意な相関がみられた。また、上方比較の後にポジティブな感情を経験する程度とも弱いながらも有意な相関がみられた ($r = .16$, $p < .05$)。

これらのことから、継時的比較によってネガティブな感情を経験する程度は、継時的比較志向性が高い人の方が強いことが示唆された。すなわち過去の良かった頃の自分と比較を行った場合も、過去の悪かった頃の自分と比較を行った場合も、継時的比較志向性が高い人の方が一様にネガティブな感情を強く経験する傾向がみられた。社会的比較志向性を扱った Buunk, Zurriaga, Gonzalez-Roma, & Subirats (2003) などでも、今回と同様に比較後のネガティブ感情との相関がみられていた。そのため、継時的比較においても、比較への志向性が重要な役割を担っていることが考えられ、本尺度を適用した研究の可能性が示唆される。

しかしながら、継時的比較と社会的比較では、同じ比較過程であってもその構造は必ずしも同じではないと考えられる。また、社会的比較志向性に関する研究の間でも、比較志向性と比較後の感情との関連については、必ずしも一貫した結果が得られているわけではない。実際に、Buunk, Zurriaga et al. (2005) では、Buunk et al. (2003) とは異なり、社会的比較志向性と下方比較後のポジティブ感情との間にも相関がみられている。そのため、継時的比較過程に関するモデルに基づいたより詳細な検討が必要である。

たとえば、継時的自己評価理論 (Ross & Wilson, 2002) では、比較される “過去の自己” は “現在” との主観的な時間距離などによって “現在の自己” に対してさまざまな影響を与えるとされていた。そのた

め、継時的比較志向性が高い人の上方比較および下方比較におけるネガティブな感情の経験は、継時的比較志向性が過去との主観的な距離に影響を与えることによって生じているとも考えられる。佐藤（2008）では、現在の自己概念や自己評価と一致する“過去”は近く、一致しない“過去”は遠く感じられることが示されている。調査1で示唆されたように、継時的比較志向性が高い人は、過去を頻繁に意識すると同時に、現在の自己に対する評価は低い傾向がある。そのため継時的比較志向性が高く、自己評価が低い人ほど、悪い過去は近く、良い過去は遠くに感じられるようになったのではないだろうか。これらはいずれも現時点に対してネガティブな影響を与えるものである。しかしながら、この点については自伝的記憶などの関連する領域の知見も併せてさらに検討していく必要があるだろう。

総合考察

本研究では、継時的比較志向性尺度を作成し、信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、作成された継時的比較志向性尺度は、十分な信頼性、妥当性を備えていることが確認された。

また、調査2では継時的比較志向性が比較後の感情とも関連していることが示唆された。継時的比較志向性は、自尊感情との相関が決して高くはなかったことから示唆されるように、自己評価に対して直接的に影響を与えているわけではない。しかしながら、社会的比較志向性（Gibbons & Buunk, 1999）の場合と同様に、比較過程について詳細に検討していく上では、重要な変数であると考えられる。特に継時的比較志向性の高い人ほど、比較後のネガティブ感情を強く感じる傾向がみられた点などは、継時的比較や“過去”が自己の感情や評価に与える影響を検討する上で重要であろう。たとえば“ネガティブな反すう”のように、悪い過去を反すうすることは抑うつなどの不適応とも関連していることが指摘されている（伊藤・上里, 2001）。しかし、本研究の結果からは、継時的比較志向性が高い人ほど、悪い過去との比較（下方比較）だけでなく、良い過去との比較（上方比較）でもネガティブな感情を強く経験していた。これは“過去”とのかかりについて、従来の研究とは異なる視点を与えるものである。そのため、今回作成された継時的比較志向性尺度を用いて更なる検討を進めていくことは、自己に対する評価や感情を研究する上で意義のあることであると考えられる。

しかしながら、比較の方向性をとらえることができていない点など、今回作成された尺度には限界も存在する。調査1では、継時的比較志向性尺度は、肯定的回想尺度とも否定的回想尺度とも正の相関がみられていた。これは、継時的比較志向性の高さによって志向

される“過去の自己”には、ポジティブなものである場合もあれば、ネガティブなものである場合もあることを示唆している。比較対象が現在よりも優れているか劣っているか、すなわち上方比較なのか下方比較なのかは、比較過程やそれによる自己評価などをとらえる上では非常に重要な視点である（Tesser, 1988; Wills, 1981; Ross & Wilson, 2002）。今回の尺度は、これらの方向性は考慮に入れず、純粹に比較への志向性の高さをとらえようとするものであったが、これらの比較の方向性も今後とらえていく必要があるだろう。

今回焦点を当てた比較志向性に限らず、継時的比較に関する研究は、社会的比較に比べてまだ少ないのが現状である。そのため継時的比較に関する研究が、今後さまざまな視点からさらに進められることが期待される。

引用文献

- Albert, S. (1977). Temporal comparison theory. *Psychological Review*, **84**, 485-503.
- Alea, N., & Bluck, S. (2007). I'll keep you in mind: The intimacy function of autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, **21**, 1091-1111.
- Beck, A.T. (1967). *Depression: Clinical, experimental, and theoretical aspects*. New York: Harper & Row.
- Buunk, A.P., & Gibbons, F.X. (2006). Social comparison orientation: A new perspective on those who do and those who don't compare with others. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology*. New York: Cambridge University Press. pp. 15-32.
- Buunk, B.P., Nauta, A., & Molleman, E. (2005). In search of the true group animal: The effects of affiliation orientation and social comparison orientation upon group satisfaction. *European Journal of Personality*, **19**, 69-81.
- Buunk, B.P., Oldersma, F.L., & de Dreu, C.K.W. (2001). Enhancing satisfaction through downward comparison: The role of relational discontent and individual differences in social comparison orientation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 452-467.
- Buunk, B.P., Ybema, J.F., Gibbons, F.X., & Ipenburg, M. (2001). The affective consequences of social comparison as related to professional burnout and social comparison orientation. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 337-351.
- Buunk, B.P., Ybema, J.F., Van der Zee, K., Schaufeli, W.B., & Gibbons, F.X. (2001). Affect generated by social comparisons among nurses high and low in burnout. *Journal of Applied Social Psychology*, **31**, 1500-1520.
- Buunk, B.P., Zurriaga, R., Gonzalez-Roma, V., & Subirats, M. (2003). Engaging in upward and downward comparisons as a determinant of relative

- deprivation at work: A longitudinal study. *Journal of Vocational Behavior*, **62**, 370-388.
- Buunk, B.P., Zurriaga, R., Peiro, J.M., Nauta, A., & Gosalvez, I. (2005). Social comparisons at work as related to a cooperative social climate and to individual differences in social comparison orientation. *Applied Psychology*, **54**, 61-80.
- Costa, P.T., & McCrae, R.R. (1992). *Revised NEO personality inventory (NEO-PI-R) and NEO Five Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- 福田 一彦・小林 重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679. (Fukuda, K., & Kobayashi, S.)
- Gibbons, F.X., & Buunk, B.P. (1999). Individual differences in social comparison: Development and validation of a measure of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- Gibbons, F.X., & Gerrard, M. (1995). Predicting young adult's health risk behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 505-517.
- Gibbons, F.X., Lane, D.J., Gerrard, M., Pomery, E., & Lastrup, C.L. (2002). Drinking and driving: A prospective assessment of the relation between risk cognitions and risk behavior. *Risk Decision and Policy*, **7**, 267-283.
- 伊藤 拓・上里 一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, **34**, 31-42. (Ito, T., & Agari, I. (2001). Development of the negative rumination scale and its relationship with depression. *Japanese Journal of Counseling Science*, **34**, 31-42.)
- 工藤 恵理子・遠藤 由美 (2007). 過去の自己は現在の自己評価維持のためにつくられるのか 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 88-89. (Kudo, E., & Endo, Y.)
- Lennox, R.D., & Wolfe, R.N. (1984). Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- 野村 信威・橋本 幸 (2001). 老年期における回想の質と適応との関連 発達心理学研究, **12**, 75-86. (Nomura, N., & Hashimoto, T. (2001). Affective quality of reminiscence, reevaluation tendency, and adaptation in old age. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **12**, 75-86.)
- 野村 豊子 (1998). 回想法とライフレビュー——その理論と技法—— 中央法規出版 (Nomura, T.)
- 野崎 秀正 (2006). 生徒の社会的比較志向性と学業的援助要請の関連 宮崎女子短期大学紀要, **32**, 113-122. (Nosaki, H. (2006). The effects of social comparison orientation on academic help-seeking. *Bulletin of Miyazaki Women's Junior College*, **32**, 113-122.)
- 長田 由紀子・長田 久雄 (1994). 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, **5**, 1-10. (Osada, Y., & Osada, H. (1994). The reminiscences of the elderly and their adaptive abilities. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **5**, 1-10)
- 押見 輝男・渡辺 浪二・石川 直弘 (1985). 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, **28**, 1-15. (Oshimi, T., Watanabe, N., & Ishikawa, N.)
- Radloff, L. (1977). The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Ross, M., & Wilson, A.E. (2002). It feels like yesterday: Self-esteem, valence of personal past experiences, and judgments of subjective distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 792-803.
- 佐藤 徳 (2008). 想起された出来事の時間的距離判断ならびに所属判断に影響を及ぼす要因の検討 パーソナリティ研究, **16**, 416-425. (Sato, A. (2002). Self concept and subjective temporal distance and memory ownership. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 416-425.)
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Suls, J., & Mullen, B. (1982). From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 97-125.
- Suls, J., & Wheeler, L. (Eds.) (2000). *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic / Plenum.
- 高田 利武 (1992). 他者と比べる自分 サイエンス社 (Takata, T.)
- 高田 利武 (1993). 青年の自己概念形成と社会的比較——日本人大学生にみられる特徴—— 教育心理学研究, **41**, 339-348. (Takata, T. (1993). Social comparison and formation of self-concept in adolescent: Some findings about Japanese college students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 339-348.)
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 21. New York: Academic Press. pp. 181-227.
- 友寄 令子・佐藤 公代 (2006). 社会的比較志向性に関する研究——その規定因と大学生生活適応への影響—— 愛媛大学教育実践総合センター紀要, **24**, 97-106. (Tomoyose, R., & Satou, K.)
- 外山 美樹 (2002). 社会的比較志向性と心理的特性との関連——社会的比較志向性尺度を作成して—— 筑波大学心理学研究, **24**, 237-244.

- (Toyama, M. (2002). The relation between social comparison orientation and psychological traits: Development of a Japanese version of the Social Comparison Orientation Scale. *Tsukuba Psychological Research*, **24**, 237-244.)
- Wheeler, L. (2000). Individual differences in social comparison. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic/Plenum. pp. 141-158.
- Wills, T.A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- Wilson, A.E., & Ross, M. (2000). The frequency of temporal-self and social comparisons in people's personal appraisals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 928-942.
- Wilson, A.E., & Ross, M. (2001). From chump to champ: People's appraisals of their earlier and present selves. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 572-584.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)
- Zung, W.W.K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.
- 2009. 7. 1 受稿, 2010. 7. 3 受理 ——